

## 第4章 考 察

### 1. 泥面子における祭祀行為の可能性

(財)大阪府文化財センター 専門調査員 島内洋二

はじめに

泥面子は土製の玩具で、土製碁石、火打石、灯明皿、陶磁器など近世の遺物とともに出土することが多く、土人形と同様に扱われる。土人形は縁起物としても用いられたようで、民間信仰との関連も示唆される。泥面子も家内安全を願う護符のような意味合いがあるとされる。当遺跡より出土した銭の波形紋をモチーフにした泥面子は、後述するように大場遺跡、長原遺跡などで出土している(図26)。その内、大別して孔を持つものと持たないものの2つに分けられる。当遺跡出土のものは、より当時の銅銭に似せているようである。泥面子は一般に子供の玩具として扱われるが、それ以外の可能性について考えていきたい。

#### 1: 泥面子の概説

泥面子は扁平で円盤状の面打と人面や動物などの顔型を模した芥子面に分けられる。今回出土した泥面子は面打に属する。享保年間(1716~1735)頃に作られたとされ、制作方法は

大別して型作りと手捻りの2種類あるが、泥面子については前者である。直径1~6cm、厚さ0.5~1.3cmと幅広い形を持ち、法量から直径2cm以下のものを小型、2.5cm前後のものを中型、3cm以上のものを大型と分けられる。18世紀代には、主に中型が作られ、19世紀以降に小型と大型の泥面子が出現する。図柄も多種多様に存在し、時代の特

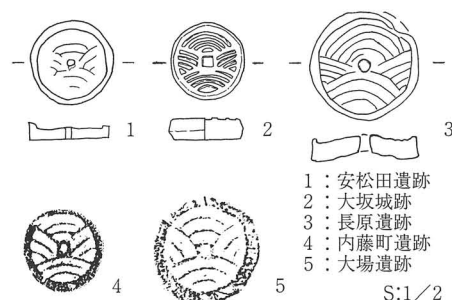


図26 波状紋を持つ泥面子



図27 泥面子図柄分類

徴を現すものと思われる（図27）。用途については穴一と呼ばれる遊びに使われたようである。ルールはとてもシンプルである。地面に穴を掘り、次にその穴めがけて投げる。穴に入れば自分のものとなる。相手が外した泥面子にめがけて、自分の泥面子を投げ当たっても同様である。もとは銭を用いていたが、大人から子供達の間に広まっていく間に泥面子に変化したとされる。

## 2：波形紋を持つ泥面子出土遺跡

銭の波形紋を持つ泥面子は多くの遺跡から出土している。大阪府泉佐野市大場遺跡では、江戸時代中期から後期にかけての遺物を大量に含む遺構（01-OX）から出土している<sup>註1)</sup>。当遺跡と同様に孔を持つ泥面子である。

同府大阪市長原遺跡では江戸時代の作土層とされる2層～3層から出土している。これもまた当遺跡と同様に薄く孔を持つ<sup>註2)</sup>。

同府同市大坂城跡では近代の包含層から出土している<sup>註3)</sup>。当遺跡の物より若干厚みがあり、孔を持たない。土人形は、幾つかの遺構から約700点が出土しており、ほとんどが江戸時代以降のものである。約700点のうち泥面子は30点ほどである。

東京都内藤町ではゴミ穴とされる遺構（C-1・C-221）から出土している。土人形は約420点出土しているが、うち200点以上が泥面子である<sup>註4)</sup>。

同都四谷三丁目遺跡では、17世紀末から幕末期まで幅広い時期の遺物を含む第19号遺構とする地下室から出土している<sup>註5)</sup>。これも孔をもたず、若干厚みがある。

同都南町遺跡では土採り跡と思われる土坑から出土している。これもまた孔をもたず、厚みがある<sup>註6)</sup>。

波形紋を持つ泥面子は、1 cmに近い厚みのあるものは孔を持たず、それより薄いものは孔を持つようである。出土状況を見ると特に際立った特徴はなく、ほとんどが包含層や廃棄土坑と思われる箇所からの出土である。ちなみに銀貨を模ったものもあり、東京都隼町遺跡や同都西新宿3丁目遺跡などで出土している<sup>註7)</sup>。

## 3：銭を用いた祭祀行為の例

次に銭を用いて祭祀を行った可能性がある遺跡を見ていきたい。よく見られるものとしては、六道銭を伴ったものである。奈良県御坊市稲宿遺跡からは近世墓の中から六道銭や鋏、かみそりを副葬するものとともに幼児墓と推測される箇所では土人形も出土している<sup>註8)</sup>。六道銭とは死人を葬る時に棺に入れる六文の銭の事で、三途の川の渡し賃や金属の呪力で悪霊が近づくのを避けるためとも言われる。

京都市平安京跡左京近衛・西洞院辻では194枚の銭貨が出土している<sup>註9)</sup>。様々な遺構から出土した銭貨を一律に扱う危険性も述べられているが、ある程度固まって出土していることから泥面子と同様に遊んだものではないかとしながらも、道路に関する祭祀品の可能性も述べられている。そ

の他に泥面子が105個出土しており、19世紀の道路に伴った側溝から多数出土している。

その他に、耕作地での畦畔や水口周辺では比較的良好な状態で遺物が出土することがあり、それらは耕作前に行う地鎮祭や正月などに行う年中行事に関連するものと取り扱われるが、耕作地内から出土する場合もいくつか存在する。その例を幾つか列挙していく。

大阪府泉佐野市に所在する中開遺跡<sup>註10)</sup>では、近世の水田に伴うものとして6箇所<sup>註10)</sup>で径14～18cm、深さ数cmのピット状の土坑を検出。そのうち2箇所<sup>註10)</sup>で銭が出土している。径16cm、深さ4cmのピット状土坑(5-00)から中国・宋銭の「天禧通寶」が文字面を上<sup>註10)</sup>に検出されている。その側から幅6cm、長さ8mm、厚み3mm弱の断面長三角状の木片が検出されており、実態は不明としながらも銭を突き刺していた棒ではないかという見解をしている。そのほかに径16cmのピット状土坑(15-00)から同じく宋銭の「治平元寶」が先と同様に文字面を上にして出土している。これらの宋銭埋納土坑は耕作地の地鎮を行った跡と推測されており、近世以降に水田の耕作を本格化されたこと裏付けるものとしている。

同府泉佐野市に所在する中嶋遺跡<sup>註11)</sup>で、地鎮土坑状遺構として多数の土坑が検出されている。3つの地区から計44箇所<sup>註11)</sup>で地鎮土坑状遺構を検出しており、うち銅銭が出土したのは11箇所である。銭だけでなく馬歯や金属片などが出土している。大きく2つの系統に分けられ、一つは土坑の大きさが径6cm前後の小型が多く、明確な掘り形が見られず金属による染み込みの範囲を示すものと思われる。そのうち径8.5cm前後、深さ2cm(1001-OX)から「通」の字が残存する銅銭をほぼ垂直の状態<sup>註11)</sup>で検出している。さらに径6.2cm、深さ3cmの土坑(1004-OX)からは「景德元寶」を検出。字面を上にして水平状態で出土しており、約1cmの緑色小石が供伴している。径8cm前後、深さ2.5cmの土坑(1017-OX)からは銅銭の一部が出土している。これらの土坑は、埋納したのではなく人為的に置いた可能性があり、15世紀以降から近世までの段階で埋まったものとしている。そのほかの8箇所については、土坑を掘った後に埋納した可能性が高い。径15.0～16.2cm、深さ10.9cmの土坑(1311-OX)に関しては、下部から炭が出土していることから、何かの祭祀行為をした後に埋納したのではと推測されている。径13.2～15.4cm、深さ12.2cmの土坑(1312-OX)からは小石を供伴しており、これもまた同様のものと推測される。これらは14～15世紀の段階で埋められたものと考えられ、段階的に同様の祭祀が行われていたと推測されている。

さらに同府泉佐野市の日根野遺跡からも銭が18箇所から検出されている。規則性は見られず、掘立柱建物の柱穴や建物に伴う地鎮の可能性は低いとしている。ピット状土坑に埋納したというよりも、人為的に地面に置かれたのではないかと推測されている。「開元通寶」「元豊通寶」「熙寧元寶」「聖宋元寶」など中世後半に流通した銭貨であることから、中世後半から近世初期頃に地鎮などの祭に伴う習俗による可能性が述べられている<sup>註12)</sup>。

類例は少ないながらも泉州地域にて以上のような、中世後半から近世にかけて耕作面に銭を用いた祭祀行為があった可能性が考えられる。

まとめにかえて

先に述べた例のように中世後半から近世初期に行われたと思われる銭を用いた地鎮などの祭祀行為を行う過程で、時代が下るにつれ祭祀行為の簡略化などにより、泥面子を代用していたのではないかということを念頭に考察してきた。しかし、泥面子の出土状況を見ると、包含層や廃棄土坑からが多く、今回のようにピットから出土するものは少ない。むしろ出土状況からは、収穫が終わった後の休耕田で子供達が遊び、忘れ残されたものが地中に残ったということも考えられる。しかし、先の例のように特定の地域において、その土地ならではの祭祀行為が行われた可能性もある。今後、他地域との比較、文献資料などと共に、泥面子が玩具以外に使用された事も想定して出土状況、供伴遺物に注意しながら類例を多く集め、論を追及することに勤めたい。

追記：資料紹介などで井藤暁子氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。

#### 〔註〕

- 註1：岡本敏行『大場遺跡 南海本線分岐線代替地造成事業に伴う発掘調査報告書』 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会 1990
- 註2：池田研『長原・瓜破遺跡発掘調査報告XV 1995年度大阪市長吉瓜破地区 土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書』 財団法人 大阪市文化財協会 2000
- 註3：鋤柄俊夫編『大坂城跡発掘調査報告I』 財団法人 大阪府文化財研究センター 2002
- 註4：井汲隆夫編『内藤町遺跡－放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－ 第Ⅱ分冊〈遺物編〉』新宿区内藤町遺跡調査会 1992
- 註5：榎木 真ほか編『四谷三丁目遺跡 －（仮称）東京消防庁四谷消防署合同庁舎建設事業に伴う緊急発掘調査報告書－』 東京消防庁・新宿区四谷三丁目遺跡調査団 1991
- 註6：井汲隆夫ほか編『南町遺跡－兵庫県東京宿舍市ヶ谷寮改築工事に伴う緊急発掘調査報告書－』兵庫県・新宿区南町遺跡調査団 1994
- 註7：A 大八木謙二編『西新宿三丁目遺跡－東京オペラシティ建設に伴う緊急発掘調査報告書－』東京オペラシティ建設・運営協議会 東京オペラシティ建設用地内埋蔵文化財調査団 1993
- B 竹内裕信編『隼町遺跡－警視庁隼町宿舍建設工事に伴う調査－』千代田区隼町遺跡調査会 1996
- 註8：奈良県立橿原考古学研究所「稲宿古墳群と近世墓」『奈良県古墳発掘調査集報1』奈良県立橿原考古学研究所1976
- 註9：伊野近富「平安京（左京近衛・西洞院辻）発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第33冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989
- 註10：井藤暁子『中開遺跡Ⅲ・上町東遺跡 南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴う発掘調査報告書』 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会 1994
- 註11：井藤暁子『中嶋遺跡他 3区・8～13区 泉佐野市日根野土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』 財団法人 大阪府文化財調査研究センター 1995
- 註12：中村淳磯ほか編『日根野遺跡 主要地方道大阪和泉泉南線建設に伴う発掘調査報告書』 財団法人 大阪府文化財調査研究センター 1996

#### 〔図版〕

図1 1：安松田遺跡出土遺物

2：註3と同じ

3：註2と同じ

4：註4と同じ

5：註1と同じ

図2 註4より抜粋したものに加筆